

■ ■ ■ ■
最多8部門をもつのはこの人

せつかくの勉強, ヤマを張らずに

エステム技術統括本部長
井上 祥一郎氏

「8部門の技術士を取得して、得なことばかり。かつていくつかの会社からかなり高収入の提示を受けた経験もある。技術士会の会合では名刺を出しただけで『あの井上さんですか』と言ってもらえる。仕事でも特にコンサルタントの人が話をしっかり聞いてくれるように感じる」。

話にもあるように、最多の8部門の技術士資格をもつ井上祥一郎氏は、多部門の資格をもつメリットをこう語った。現在、汚水処理施設の維持管理を手がけるエステム（本社、名古屋市）で、技術統括本部長を務めている。

技術士に合格することの難しさはいまさら言うまでもないだろう。一つの部門に合格するのさえ難しいのに、8部門である。これまで一人で3部門以上に合格し、登録した人は60人。ちなみに井上氏に次いで保有部門が多い人は5部門だ。

井上氏は「多くの部門を取得した理由の一つは、自分自身への挑戦。もう一つは自分が手がけてきた技術の熟成度を試験の論文を通じて、その道の専門家にチェックしてもらうためだ」と話す。

全部で13回挑戦

1966年に信州大学農学部林学科を卒業した後、83年にまず林業部門（森林土木）を取得した（当時39

歳）。当時は伊藤忠林業に勤め、林業にかかわっていた。

その後、やや間をあけて90年の水道部門（下水道）を皮切りに7年連続で7部門に合格した。91年に衛生工学部門（廃棄物処理）、92年農業部門（畜産）、93年水産部門（増養殖）、94年建設部門（建設環境）、95年環境部門（環境保全計画）、96



年応用理学部門（地球物理学および地球科学）という順だ。

最初に取得した林業部門と、2番目に取得した水道部門は、いずれも3回の挑戦の末、合格したもの。それぞれ1年目は面接で、2年目は論文が書けずに不合格になったそう。林業部門に合格した直後に、いったん衛生工学部門に挑戦して不

格になったこともあるので、全部で13回、技術士の試験を受けたことになる。

井上氏が複数の部門の資格をもつことに対し、専門性を疑問視する人もいた。これに対し、「技術士は広くものごとを見ることができなければならない。1部門に合格しても、その知識を残りの18部門に応用するのは難しい。技術士試験を通じて、同一技術をほかの分野の学識経験者（＝試験官）に認めてもらうのも重要だ」（同氏）と説明してきた。

これまで取得した各部門は、「水と緑と土と環境」というキーワードですべてとることができると話している。

「資格をとるのは目標でなく手段。あくまで取得してから、どれだけのいい仕事につなげるかが重要だ」とも井上氏は強調する。

「事前に準備はしない」

これだけ多くの部門に合格した井上氏がどうやって技術士の試験に備えたかは、だれもが知りたいところだろう。

でも、井上氏は自身の勉強方法は恐らくほかの人の参考にならないだろうと思っている。なぜなら、例えば試験の経験論文はあらかじめ書いてそれを暗記するように勤めている参考書が多いが、自身はあらかじめ書いて準備したことがないからだ。

「試験会場に入ってから具体的に何を書こうか考えてきた。そのためには、論文のコンセプトをきっちりしておき、ものを書き慣れておく必要がある。書き慣れるには、普段か

ら手書きで手紙を書くことなども役立つ」と井上氏は言う。

論文を書くうえで重要なポイントとして以下の三点を挙げている。①試験官が興味をもつように書く②わかりやすく書く③説得力を持たせるために数字を交えた定量的な表現を盛り込む。ただし、③にかかわる数字を覚える準備だけは、事前に必要だと井上氏は話している。

せつかく技術士受験のための勉強をするのだから、ヤマをかけずにしっかりとコンセプトをもち、絶えず受験する分野全体をみながら勉強するのが大事、という信念をもっている。

今後は後輩の合格をサポート

今後、井上氏が受験する予定はな

い。社内で同じ技術を一緒に研究している後輩たちに、自分と共同で開発した技術を論文に書いてもらい、それで技術士に受かってほしいと願っている。自分の経験をもとに、論文の添削などをして受験をサポートしているという。

会社から技術士資格を取るよう言われている人に対しては、次のよ

うにアドバイスする。「会社から指定された部門で受験するように求められたら、その前にまず自分が最も通りやすい部門を受験して合格する。それから会社の求める部門を受けた方がいいだろう。複数の部門をもつことはいいことだと思うので、決してむだな遠回りにはならない」（同氏）。

試験前1カ月間の勉強の極意

技術士二次試験までの1カ月間をどう勉強するのがいいか。8部門に合格した井上氏は、次のようにアドバイスしてくれている。

二次試験まで、あと1カ月という時期になっても決して焦ることはない。1カ月あれば、かなり勉強ができるからだ。

民間企業に勤める人と、官庁に勤める人とは、勉強の重点の置き方は異なると思う。

まず、民間の人は午後の試験（一般的専門知識の論文）向けの勉強に力を入れるべきだろう。建設部門を受けるなら、やはり建設白書を読むのが一番いいのではないかと。

まず白書から自分で重要なキーワードを拾い出し、それに短く簡単な説明を付けていく。私は一冊の薄いメモ帳にまとめてきた。集中して勉強できるのは2時間が限度だろうから、毎日2時間だけ集

中し、この作業を繰り返す。いったんこうしてまとめたメモは、15分くらいですべてを簡単に見返すことができるようになる。

キーワードを覚える際に、その説明文の一字一句を間違えずに覚えようとしてはいけない。この点に注意が必要だ。そういう覚え方は非常に苦痛を伴うし、かえって言葉のニュアンスを誤って覚えることにもなりかねない。言葉のニュアンスを正確に伝えることができるように記憶していくのが肝要だ。

官公庁の人は、民間の人とは逆に、午前中の試験（経験論文）向けの勉強に力を入れるべきだろう。自分の体験について、何を書きたいか全体の構成をしっかりと考える。この場合も、一字一句を書き出して覚える必要はない。あくまで体験論文のコンセプトをきっちり繰り返すことが大切だ。

自分で書こうとしているテーマが適切かどうかは、身近な技術士の合格者に聞いてみるのが一番だろう。自分がこれまで携わった工事の経験をすべて把握している人に聞けるとなおのこと望ましい。自分が書こうとしているテーマより、もっといいテーマを、過去の経歴のなかから見つけ出してもらえるかもしれないからだ。

技術士試験はある意味で体力勝負の部分がある。だから、健康には十分気を付けるべきだ。単身赴任の人も、家族と一緒に暮らす人も、うまく自分の環境に合わせて健康に気を付けてほしいと思う。

●技術士試験のための勉強は

【民間企業に勤める人】

午後の一般的専門知識の論文に重点

【官庁に勤める人】

午前の経験論文に重点